

生部委員として夜遅くまで学生の相手をし、家に帰っては、ご主人やお子さんの面倒をみ、ご主人が病気で入院されたときには、その看病をしながら、四百字詰原稿用紙で八百枚にも及ぶ翻訳をなしとげられたことを考えると、頭の下がる思いがする。私には、とてもできないことだ。このような人を失ったことに、つくづく、人生の無常を感じる。

(本学教授・文学部長)

近藤矩子さんを惜しむ

石 本 キ ミ

近藤矩子先生が福岡女子大学のフランス語担当のはじめの専任者として就任なさったのはついこの間のことのような気がするが、あれから六年の歳月が流れて行った。当時の女子大はまだ古い木造校舎で、しかも国道3号線幅員拡張のためわれわれの研究室のあった第一棟は車の音に悩まされていた。冬ともなれば北風の吹き込む部屋で小さい電気ストーブを前にして先生と私は互に肩を寄せ合ってお弁当をご一緒したりお茶をいただくことが屢々であった。そんな時矩子先生は仕事に生きることの喜び、そして研究への尽きぬ情熱を眼に輝やかしながら披瀝なさった。おたがい主婦であり母親であることが生じさせる研究職との齟齬を啣ったり励まし合ったりしたものだ。

しかし彼女の廿世紀フランスの主知主義的、自由主義的傾向は十九世紀のイギリス的な常識派の私を驚かすこと屢

々であった。彼女のそうした傾向の中に、そして若さの中に、砥ぎすまされた冷徹な知性と、その無限の発展の可能性を認めて、頼母しくも羨ましくも感じたことである。

矩子さんが幼時から終戦までを過ごされた旅順や大連は私にとっても故郷のような場所であるのでそれもよく話題になった。私の父は関東州租借直後の旅順、大連を活躍の舞台としていたのでロシア人が建てた館で私たち一家はお伽話のような生活をしていたことや、邸の周囲に聳える七八十本のアカシヤが遅い春には一斉に白い房を揺がせて薫風をそよがせた。父は黒塗の馬車でお役所に通っていた。そんな他愛ない話になつかしそうに耳を傾けて下さり彼女の記憶の中より新しい満州の生活を語って下さった。花に詳しい人は「あれはアカシヤではなくて、にせアカシヤですよ。ミモザという黄緑の小粒の花をつけるあれが本当のアカシヤですよ。」などと注意して下さいますが、矩子さんと私にはアカシヤへの、「アカシヤの大連」への、そして私たちにとってアカシヤが象徴する爆発的に咲く満州の春の花々の美しさ、夢のように仕合せな少女時代への追憶のすべてであった。たとえ学名であっても「にせアカシヤ」とは冒瀆である。

福岡女子大に新校舎が与えられ四階に近藤先生も私も城を構えることを許された。研究室は私たちが望めるかぎり可成りよい環境のサンクチュムである。もし矩子先生が健康

に恵まれその部屋を根城とした研鑽の日月が許されれば、必ずやアナトール・フランス研究の日本に於ける第一人者となられたであろうと私は確信する。鋭い感覚と理智と機智に富んだ彼女の表現力に期待をかけたのは私だけではないからう。

病篤い先生を残して旅に出た私は四月十六日の早朝ミサの行なわれているサクレクール寺院を出て、そのテラスから春鶯をついて徐々に姿を現わすパリを見下しつつ矩子先生のことを考えていた。大連からお引き揚げの前後数年間を病床にお過ごしになり、再起の後お始めになった超人的なご努力が実ってバりに留学なさりここで生涯の最良の日々をお過ごしになったのに、再び病床で苦闘なさっていらっしゃるお姿を思い浮べ胸さされる思いであった。かつて長いいたづきから立ち上られたように、もう一度病との戦に勝利を納めていただくよう奇蹟が起らぬものか。私がモンマルトルの丘で先生のことをご案内していた時には既に先生の戦は悲しくも空しい終りになっていたのだ。

お元気な時には巢立って行く学生を送る会ではよく詩を誦じて若い人々の心をゆさぶって下さった先生、学生部の委員の一人として労を惜しむことなく他の委員と共に苦勞多い学生部長を助けて下さった先生、病床にありながら、「こうしていると時間が勿体なくて。気分さえ良ければ本を読みますよ。」とおっしゃった先生はご家族への深い愛

着に心のこし、研究への未練を抑えながら久遠の眠りにおつきになって了った。ご家族にとっては償うことの出来ない喪失をお悼み申し上げ、また福岡女子大学にとっても大きな喪失であることを悲しむものである。(本学教授)

近藤助教授の略歴と業績

略 歴

昭和4年11月25日 三重県津市に於て羽田氏の次女として生れる。

同 21年 大連の芙蓉高等女学校を終戦のため中退。

同 27年8月 大学入学資格試験合格。

同 28年4月 東京外国語大学フランス科入学。

同 31年7月 運輸省観光通訳資格取得(フランス語)。

同 32年3月 東京外国語大学卒業。

同 32年4月 東京大学大学院仏語仏文学課程入学。

同 33年11月 アシェート・ラルース フランス文学賞受賞。

同 33年11月より 35年10月までフランス文学賞による招聘及びフランス政府給費生としてパリ大学文学部に留学。